

第2章 基山町の維持向上すべき歴史的風致

「歴史的風致」とは、「地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動とその活動が行われる歴史上価値の高い建造物及びその周辺の市街地とが一体となって形成してきた良好な市街地の環境」（歴史まちづくり法第1条）と定義されている。

本町は、背振山系を擁し、水と緑が豊かで、悠久の歴史の中で人々の暮らしが育まれてきたまちである。

町内には、基山に築かれた国指定の特別史跡基肆城跡をはじめ、中世戦国時代の木山城跡や宮浦城跡、創建を古代に遡るとされる大興善寺や近世建築の荒穂神社・宝満神社等の寺社、長崎街道沿いの近世建造の国境石や町家建築物等、歴史の重層性を物語る建造物が数多く点在している。

加えて、荒穂神社の御神幸祭や町内に点在する祠を巡るどろどろまいりをはじめ、様々な伝統行事や民間信仰等が人々の日常生活の中に色濃く継承されている。

これら歴史的な建造物と、歴史や伝統を継承する人々の活動が一体となって基山町の歴史的風致を形成している。

本町における維持向上すべき歴史的風致として下図に示す6つが挙げられる。

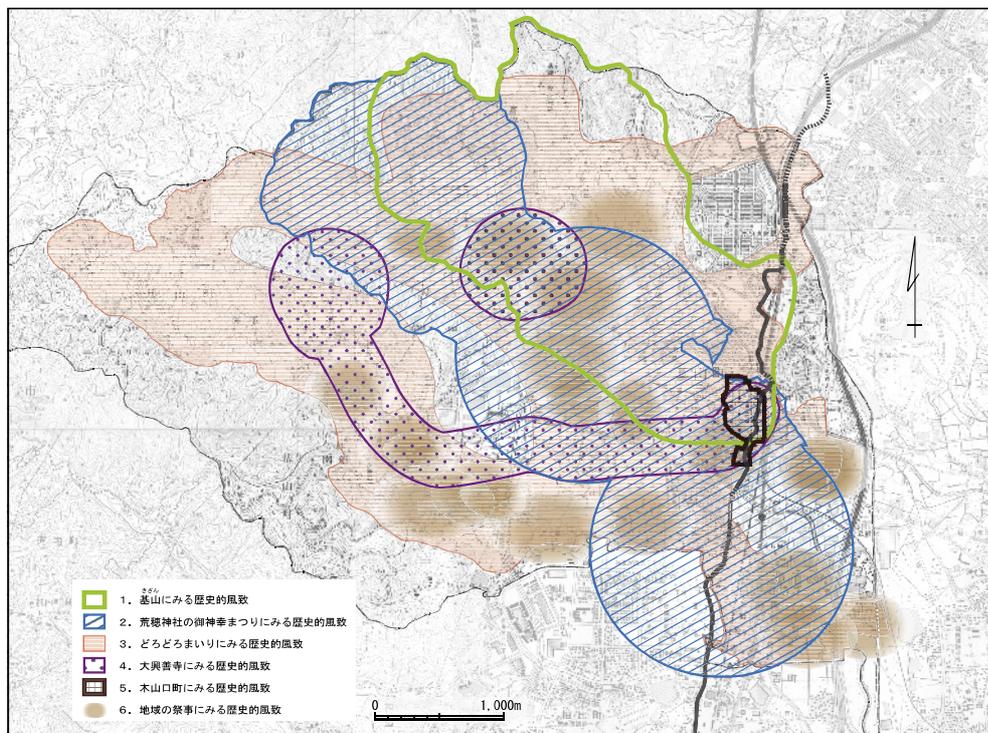


図 歴史的風致の範囲



写真 特別史跡基肆城がある基山



写真 荒穂神社の御神幸祭



写真 どろどろまいり



写真 大興善寺



写真 木山口町



写真 地域の祭事
(小倉老松神社のコモツタキ)

1. 基山にみる歴史的風致

(1) はじめに

本町の北部にある基山には、多様な文化遺産がある。それは、特別史跡基肆城跡の土塁、水門跡の水流、草スキー場、天智天皇欽仰之碑、初日の出の眺望地、タマタマ石などの様々なものや風景であり町民の心に刻まれ、ふるさと基山の象徴的存在となっている。

これら基山に刻まれた多様な文化遺産の一つひとつは、どこかで出逢うものであり、本町民にとって欠くことのできない、心に残る大切な場所であり、貴重な文化財として守り伝えらるとともに、信仰に関わる営みの場、登山や草スキーなどの親しみの場として、郷土の先人たちから今に受け継がれている。

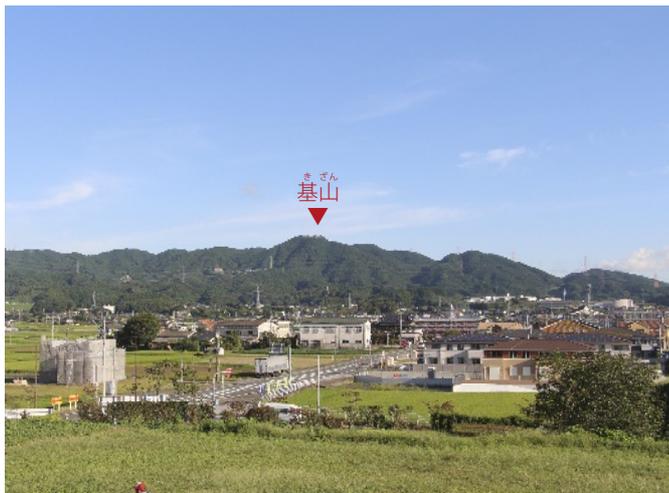


写真 基山遠景

(2) 基山にみる歴史的風致

基山にみる歴史的風致は、下表のように示される。

		建造物と環境	営み
基山にみる歴史的風致	1) 特別史跡基肆城跡にみる歴史的風致	<ul style="list-style-type: none"> ●特別史跡 基肆城跡に関わる建造物と環境 <ul style="list-style-type: none"> ・特別史跡 基肆城跡に関わる建造物 (土塁・石塁・南水門 等) ・特別史跡 基肆城跡の顕彰活動に関わる建造物 (天智天皇欽仰之碑 等) 	<ul style="list-style-type: none"> ●特別史跡 基肆城跡を伝える活動 ・みんなが伝える山
	2) 信仰の山・基山にみる歴史的風致	<ul style="list-style-type: none"> ●信仰の山・基山に関わる建造物と環境 <ul style="list-style-type: none"> ・荒穂の神信仰に関わる建造物 (タマタマ石と荒穂神社 等) ・ガンジョウジに関わる建造物と町並み (住吉神社 等) 	<ul style="list-style-type: none"> ●信仰の山・基山に対する信仰活動 ・荒穂の神信仰 ・ガンジョウジ
	3) 教育鍛錬の山・基山にみる歴史的風致	<ul style="list-style-type: none"> ●教育鍛錬の山・基山に関わる建造物 <ul style="list-style-type: none"> ・登山道 ・草スキー場 	<ul style="list-style-type: none"> ●教育鍛錬の山・基山で行われる行事 ・登山 ・草スキー

<願成就とガンジョウジについて>

漢字では「願成就」と記するが、町内では呼称「ガンジョウジ」が定着しているため本計画でもカタカナで「ガンジョウジ」と表記する。

1) 特別史跡 基肄城跡にみる歴史的風致

①特別史跡 基肄城跡に関わる建造物と環境

ア) 基肄城跡の歴史と特別史跡基肄城跡の研究

【基肄城跡の歴史】

基肄城は、飛鳥時代末期、7世紀の半ばから後半にかけての朝鮮半島三国（高句麗・百濟・新羅）と現在の中国（唐）を含む国際情勢が契機となって、時の天智天皇によって築城された日本最古の朝鮮式山城である。歴史を紐解くと、天智2(663)年に百濟救済のため朝鮮半島へ出向いた倭国（現在の日本）は、朝鮮半島白村江において唐・新羅の軍に敗戦。敗戦の翌年である天智3(664)年に壱岐・対馬などの北部九州に防人と烽火を配置するとともに大宰府の北西部に水城を築き、天智4(665)年に大宰府の北の守りとして大野城、南の守りとして基肄城を築城した。その後、大和政権の成立とともに再整備が行われ、古代都市大宰府の南の守りとして土塁・石塁を維持するとともに、内部に礎石建物を築造している。

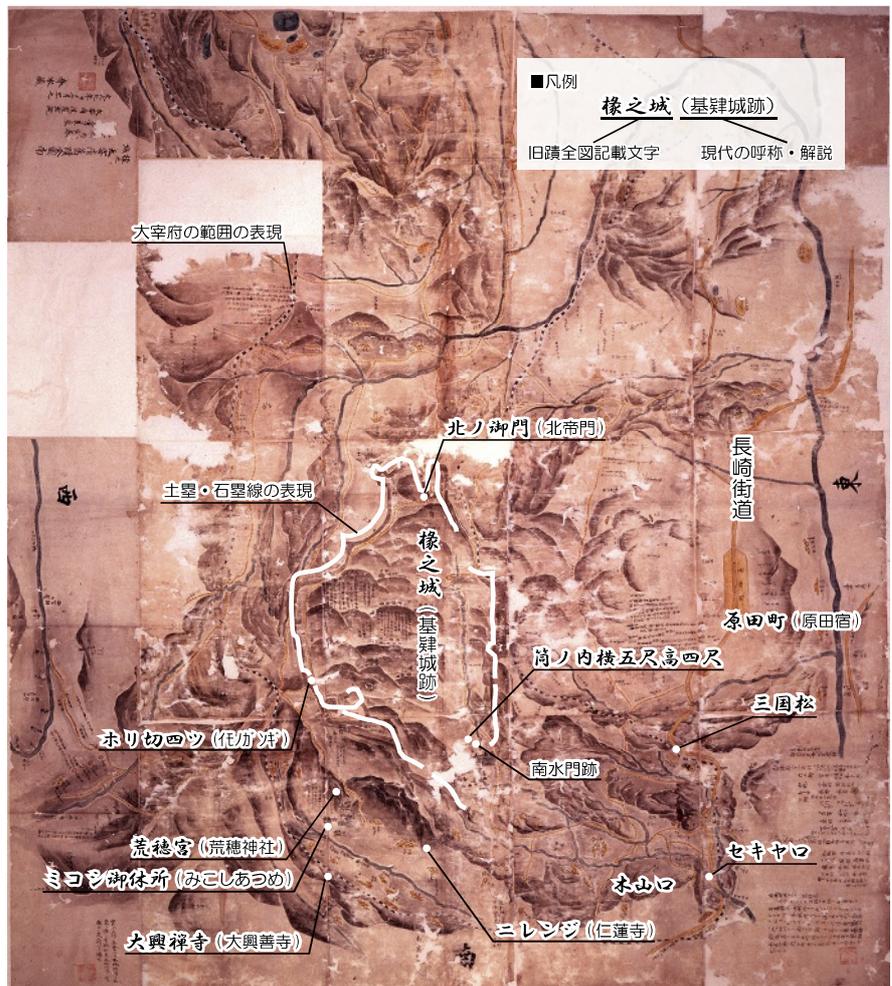
基肄城の「キイ」は、六国史に記されているが、二種類の記載として見える。『日本書紀』には、飛鳥時代の記載として「椽之城」の文字で記され、一字記載から二字記載が望ましいとする社会意識の変化に対応するように奈良時代以降の記載では『続日本紀』から「基肄城」記載へと変化している。

【特別史跡基肄城跡の研究】

基肄城跡について『筑前國續風土記』『椽之城 太宰府舊蹟全図南(以下、『旧蹟全図南』とする)』『筑前國續風土記拾遺』『太宰管内志』に記載があり、『日本書紀』に記された基肄城が築かれた場所が基山であるということが、すでに江戸時代には認識されている。

その後、明治期後半からの神籠石論争の中で、古代山城ではなく神宿る山を守る神籠石として論議された時期があり、一時的にはあるが、基肄城跡が古代山城であるとの認識が揺らぐ時期があった。しかし、大正元年(1912)の関野貞氏による現地調査によって、『日本書紀』『続日本紀』にある基肄城であることが確定した。

これを受け、基山村(当時)園部の専



資料 『旧蹟全図南』 文化9年(1813)写し 一部加工

念寺住職であった久保山善映氏による精力的な基肄城研究が進められ、昭和12年(1937)12月21日に国の史跡に指定、昭和29年(1954)3月20日には、国が指定した史跡のうち、特に価値の高さが認められて、佐賀県で初となる国の特別史跡に指定された。

イ) 特別史跡基肄城跡に関わる建造物

【土塁・石塁・南水門】

基肄城は、^{きざん}基山一帯が元来備え持つ急峻な地形を巧く利用するように、^{きざん}基山山頂(標高404.5m)からその^{ひがしのみね}東峰(標高327m)にかけて大小の谷部を囲むように約3.9kmの城壁線を廻らし外敵からの侵入に備えている。この城壁線は、尾根上では土塁・深い谷部では石積みによる石塁で構成されている。このうち最も標高の低い南水門と呼ばれている石塁には、城内の谷水を排水するための水門が設けられており、現在も水を流し続けている。

【礎石建物群】

^{きざん}基山山頂から^{きたのみね}北峰に延びる稜線から東へ下る尾根と東峰から南に下る尾根には、現在の宅地造成と同様に階段状の平場を造りだしたうえで、武器や食料等の倉庫として建物群が建てられていた。これらは城内で採取できる石材を礎石として建てられ、屋根には瓦が葺かれていた。現在約40棟が発見されている。^{こめぐら}米倉礎石群では、その名のとおり以前に多量の炭化米が採集されたと伝えられている。

【東北門・北御門】

基肄城の城壁線の途中には、推定も含めて4か所の城門跡があったとされている。このうち東北門と^{きたみかど}北御門には門としての明確な遺構を見ることができる。東北門では、門柱・門扉を据えていた礎石が残存しており、門扉の軸穴には金具の一部が残存している。北帝門では、周辺の城壁線の形態からより強固な守りの意識が窺われる門であり、規模も大きく門の左右の壁面に石積みも残っている。文化9年(1812)の写しとされる『旧蹟全図南』には、「^{きたのこもん}北ノ御門」という標記も見られ大宰府政庁からの正門とも推察される。

【関屋土塁・とうれぎ土塁】

基肄城の築城の目的は、「大宰府の南の守り」と言われるように、有明海方面からの敵をいち早く察知し、大宰府に知らせるとともに、その進軍を防ぐこととされている。この二つの土塁は、同時期に大宰府防衛の北の守りとして築かれた水城(特別史跡)を小型にしたもので、基肄城と一体的に大宰府の南の外郭線の一部を担っている。水城と同じく築かれた位置は、古代官道を横断するような交通要衝地であり、そこは現在も国道3号・JR鹿児島本線が通



写真 久保山善映氏



写真 南水門と石塁



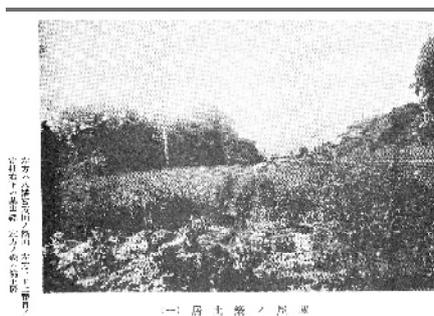
写真 礎石建物群



写真 北御門(北帝)



写真 とうれぎ土塁



資料 関屋土塁 昭和11年(1936)
(佐賀県『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告書』、1936)

ている。

ウ) 特別史跡基肆城跡の顕彰活動に関わる建造物

【天智天皇欽仰之碑】

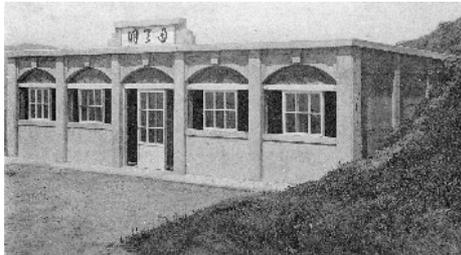
天智天皇欽仰之碑は、昭和8年(1933)に刊行された歴史研究雑誌『肥前史談』にも書かれているとおり、同年に通天洞、展望所とともに建造された基肆城を築いた天智天皇を称える碑である。基山山頂にある土壇脇に建立され、石積み正方形の基壇上に銅製三角柱形(頂部三角錐形)を呈する碑は、当初天智天皇ご本人の像を建てることで計画が進んでいた。しかし、当時の宮内省から二つの理由で許可されず、現在の形に落ち着いたと肥前史談会は伝えている。その理由とは、①天皇像として造形化することはならない。②天智天皇の御姿が現存していない。というものであった。三角柱形の表面に、「天智天皇欽仰之碑」と陽刻され、一説には齊明天皇(天智天皇の母)崩御の地、朝倉 橋 広庭宮を向いていると伝えられている。



写真 天智天皇欽仰之碑

【通天洞】

通天洞(通称 避難所)は、天智天皇欽仰之碑と展望所とともに、昭和8(1933)年に造られた。天智天皇欽仰之碑の東に位置している。太平洋戦争開戦直前であっただけに、防空避難所としての役割もあったものと推察できるが、当時発刊された絵葉書からは、硝子入り木製の引違窓や扉が付設されていたことが分かる。「通天洞」としたいきさつは、文字通り天にも通じるものとしての部屋(洞)であった。陸屋根のボックス形の建造物は、当時としては先進的な意匠であり、コンクリート洗出し技法を用いたモダンな建造物であった。昭和52年(1977)に、陸屋根上部に展望施設が増設されている。



資料 通天洞(建築当時 昭和8年)



写真 通天洞(現状)

【展望所跡】

天智天皇欽仰之碑と通天洞（通称 避難所）と同時期に建てられた展望所は、昭和41年（1966）建設の休憩所横の高まりに建てられた。コンクリート製の8脚柱の内部に円形のテーブルならびに椅子が設けられたギリシャ様式の建造物が写された絵葉書が残されている。現在、上屋は老朽化のため解体撤去されているが、基礎部が残されている。



資料 展望所（建築当時 昭和8年）



写真 展望所基礎（現状）

【史跡石標】

史跡石標は、史跡地内に32ヶ所設置されている。古くは、史跡指定前の大正13年（1924）に北帝門や、大礎石群など主だった遺構群5ヶ所に設置された。基肄城跡が昭和12年（1937）に史跡指定された後の昭和17年（1942）に建てられた石標は南水門にあり、「史蹟 基肄（椽）城跡」と記されている。その年代に建てられたのは、ここ1ヶ所のみで、貴重な石標である。基山山頂にある石標は、「特別史蹟 基肄（椽）城跡」と記され、昭和29年（1954）に特別史蹟指定された後の、昭和40年（1965）に建立された。同年には、基肄城跡内に来訪者向けの遺構説明表示が建てられ、その後昭和60年（1985）に関係する遺跡である関屋土塁、とうれぎ土塁にも遺跡の存在を知らせる目的で史跡標柱、又は解説板が設置され、基肄城の広がりを住民に対し示すに至っている。山頂の特別史蹟を示す石碑は、近年、町内の民間団体によって、文字色が薄れつつあった銘文の修理が行われている。

また、民間団体による簡易な道標が8ヶ所設置されるなど民間活動による基肄城跡活用への支援の輪が広がってきている。



写真 史跡石標 昭和17年（1942）



写真 とうれぎ土塁と遺跡解説板

②特別史跡基肄城跡を伝える活動

ア) みんなが伝える山

基肄城は、近世から絵画資料をはじめ多くの記述にみることができ、忘れ去られた存在ではなかったことが認識できる。近代に入り基肄城の顕彰に精力的に動いた人物が、基山村(当時) 園部の専念寺住職であった久保山善映氏である。久保山善映氏は、関野貞氏による『日本書紀』『続日本紀』にある基肄城であることが確定したことを受け、昭和13年(1938)に発行された『肥前史談』の「基肄城址史蹟指定記念號」で次のように回想されている。

「關野博士登山の結果従來學者間に神籠石、並に其の水門として論議されてゐた住吉神社境内の遺跡が、基肄城址に相違ないと發表されるに及び、若駒の春草に出遭つたようにピッタリ引きつけられたのだつた。」

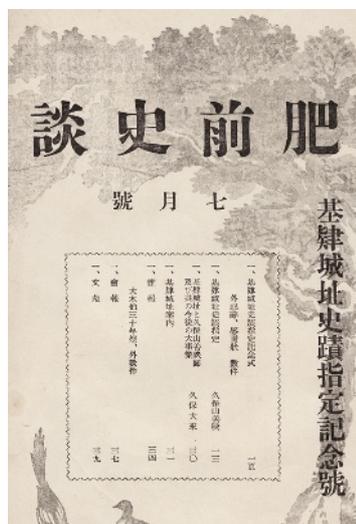
関野貞氏の現地調査に基づく発表は、大正2年(1913)になされており、この直後に迷いから解放されたかのように、久保山氏の精力的な基肄城研究とその成果について肥前史談会を中心として、既に周知化の進んだ水城跡や大野城跡に基肄城跡を追いつかせようと、町内外の人々へ向け、学術的価値をあらゆる方法を駆使しながら頻りに発信していく。久保山氏はその思いを、昭和3年(1928)と昭和5年(1930)の『肥前史談』の中で、大宰府の北の守りとしての大野城ばかりが注目されていることや、基肄城が筑前にあるという誤記が多くかつそのことを「此の地に住んでいながら知らなかつた。」ことの悔しさを記され、基肄城研究に邁進した思いを書かれている。また、基山尋常高等小学校長を務めた松尾禎作氏は、県内の文化財に係る多様な職に就き、幅広い学術的な知見により久保山氏と同時期に活躍し、基肄城に関する論文を発表するなど、基肄城の価値を広めるにあたって貢献した。その後、郷土史家である松隈嵩氏、考古学者である鏡山猛氏による考古学的な調査や研究がなされ、全国的に知られるようになった。

久保山氏の精力的な基肄城跡の調査研究とその成果が認められ、久保山氏が所属する肥前史談会が発起人となり、昭和5(1930)年に佐賀県知事を総裁とする「天智天皇奉讃銅柱建設會」を組織して、建設費の寄付を募る活動を開始した。起工式は天智天皇に因む「時の記念日」である6月10日に行われている。工事中は、基山村の大人から小学生までもが資材の運搬などの協力を行った。

この活動は、3年後の昭和8(1933)年に実を結び、「天智天皇欽仰之碑」として起工式と同じく6月10日に除幕式が、佐賀県知事をはじめ基山村の小学生までの千名以上の出席者により挙行された。当時の記念写真の中には、誇らしげに胸を張る小学生の姿も見える。この建設に係る寄付者については、一般は1円以上、児童生徒は1銭でも寄付した者の氏名がすべて記載されて銅柱内に納められており、今後も永久に保存されていく。

この奉讃銅柱建設事業では、銅柱の近くに一般見学者や学校遠足、登山客等が雷雨などに遭遇した際の休憩(避難)所とされた「通天洞」や基肄城全体が見渡せる頂部に展望所を建設した。現在も基山山頂にそびえる天智天皇欽仰之碑について、当時を振り返り「建設にあたり基山の小学生も麓から砂や石をリュックサックに背負い運んだ」と多くの人々が語ってくれる(『思い出すまに』松野孝則 1994)。

こうした活動などの基肄城跡を伝

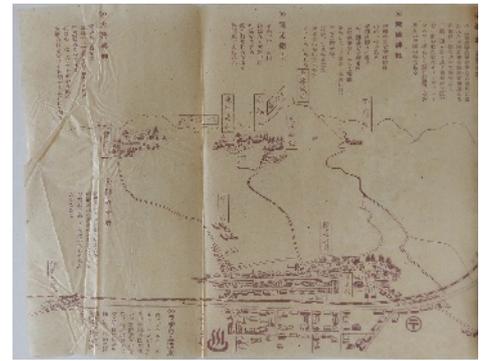


資料 肥前史談 昭和13年(1938) 基肄城跡史蹟指定記念號



資料 建立記念写真 昭和8年(1933)

えようとする気運の高まりのなか、昭和12年(1937)12月21日に城郭史上における極めて高い価値が認められて国の史跡に指定された。翌年5月29日には基山山頂の天智天皇欽仰之碑を囲んで、県知事をはじめ100名以上の出席者により記念式典が行われている。指定時の説明として天智4年(665)に築かれた大宰府防衛のために大野城と共に築かれ、佐賀・福岡両県にまたがる「雄大な」山城として指定するというものであった。そして、昭和29(1954)年3月20日には、国が指定した史跡のうち、特に価値の高さが認められて国の特別史跡として、佐賀県で最初に指定されている。



資料 木山口商工会発行の基山町名所ガイド図
昭和28年(1953)発行

基肆城跡を伝える活動は、久保山善映氏の精力的な取り組みをはじめとし、史跡指定のための調査時から急増した登山客へ対応するための石標設置にも見ることができる。その都度、時流に合わせた取組みが展開され、史跡指定されたことにより、地域の誇りとして受け継がれ、多くの人々によって顕彰活動が続けられ、現在でもボランティア活動に支えられた基肆城解説活動が続いている。

木山口商工会初代会長を務めた松隈来造氏等によって、基肆城跡をはじめ^{きざん}基山の観光資源を活用した情報が町内外に広められ、昭和28(1953)年に木山口商工会が発行した基山町名所ガイド地図や、名所・旧跡を案内する絵葉書の配布を通して、基山の基肆城として広く知られるようになった。

この松隈来造氏が行った広報活動は、旧木山口町の入り口にある若宮八幡神社境内に、松隈来造翁顕彰の碑が建ち、その銘文中にその業績をみることができる。



写真 松隈来造翁顕
昭和37年(1962)建立



写真 松隈来造翁顕彰碑文

立 シ テ 千 古 二 伝 フ	ヲ 称 へ 顕 彰 碑 ヲ 建	得 テ 翁 生 前 ノ 功 績	ノ 他 多 数 ノ 協 賛 ヲ	茲 ニ 町 及 町 議 会 ソ	伝 開 発 に 努 ム	ラ ヂ ウ ム 温 泉 ノ 宣	大 興 善 寺 つ つ じ、	址、秋 光 川 源 氏 堂、	事 業 ト シ テ 基 肆 城	テ 奔 走 セ リ。観 光	ヲ 投 子 主 導 役 ト シ	致 ノ 運 動 ニ ハ 私 財	甘 木 線 分 岐 工 場 誘	【 碑 文 内 容 】
--------------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------	----------------------------	--------------------------------------	----------------------------------	-------------------------------	--------------------------------------	------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------	----------------------------

その後も観光ガイド等に記されることで基肆城の存在が伝えられ、昭和28年(1953)に観光資源として広報活動が展開された特別史跡基肆城跡は、昭和41年(1966)には山頂に休憩所が建設される等、多くの人々が訪れる場所として定着し、それに呼応するように、多くの来訪者を迎え入れるために、町内の婦人会、青年団、子どもクラブそして町内の製薬会社の青年部などが特別史跡基肆城跡をはじめ関屋土塁、とうれぎ土塁など、基肆城に関係する場所にある標柱をはじめ、周辺環境を整えるための清掃を実践し、近年では町外の民間企業による活動へと広がりを見せてきている。その記録が昭和46年(1971)から現在

まで町の広報などに見ることができ、来訪者へのおもてなしの心とともに、特別史跡基肄城跡がある基山が本町の誇りとして町民の心の中に抱かれている。これを表現するように、平成元年（1989）に制定された町民憲章には「歴史に残る基肄城跡に誇りを持ち・・・」として記されている。

また、観光資源化されるとともに基山をガイドする活動へと幅が広がり、民間活動団体である「基肄山歩会」によって、水門跡でのガイドマ

ップ配布が平成5年（1993）に始まり、現在もガイドマップ配布のみならず基山の保全活動が同会によって進められている。近年では、平成27年度（2015）に基山町で開催された古代山城サミット基山大会の折に、結成された文化遺産ガイドボランティアの活動が自立的な活動へと発展し、「基肄かたろう会」として継続されている。



資料 基山の清掃活動（『昭報きやま』昭和46年（1971））



写真 民間会社敷地内にある「関屋土塁」碑



写真 基肄山歩会によるマップ配布ポスト



写真 基肄かたろう会によるガイドの様子

平成22年（2010）に行われた基肄城水門跡の修理工事に先立つ行事として、町民有志によって「ありがとう水門セレモニー」が行われ、この時、水門を舞台として行われた基肄城築造の物語劇が原点となり、平成24年度（2012）～27年度（2015）まで基山町立小中学校合同創作劇「こころつないで ～基肄城に秘められたおもい～」として公演されていく。また、平成25年度（2013）には、町内の歴史系民間団体である基山の歴史と文化を語り継ぐ会と町立図書館との協働で、漫画形式による『発見きやまの歴史1 基肄城のヒミツ』が刊行され、町内の全世帯に配布された。この頃を境に、特別史跡基肄城跡ある基山が町民の中に覚醒していく。

令和2年（2020）には、大宰府関連史跡等を構成文化財とする日本遺産「古代日本の「西の都」」として特別史跡基肄城跡が加えられ、これを契機として外国人観光客が次第に多くなってきている。

基肄城跡を伝える活動は、大正、昭和、平成へと一貫した町民の気持ちとともに、形を変えながら現在も続いている。



資料 「発見! きやまの歴史1」平成25年（2013）



写真 水門セレモニーでの創作劇平成22年（2010）



写真 創作劇「こころつないで」平成24年（2012）

③まとめ

我が国古代最大と言われる国難において、国防を担うために築かれた基肄城跡。山城としての役割を終えた後も、郷土のシンボル、誇りとして地域の人々によって大切に守り受け継がれ、国の特別史跡となった。今もなお基山の山谷には、土塁・石塁による城壁が延々と廻り、この途中にある門跡、城内部の礎石建物群が当時の状況を伝え、南水門は、現在も城内の谷水を外へ流し続けている。そして、基肄城跡に関わる顕彰や伝える活動の賜物である、天智天皇欽仰之碑・通天洞・展望所・史跡石標（49頁参照）等は、本町の先人達の郷土の宝としての意識の表れでもある。これらは、基肄城の築城以来1,350年の時を越え、わが国有数の古代山城の威容を伝える遺構群とそれを大切に守り続けてきた象徴である建造物群と人々の活動の姿が、特別史跡基肄城跡を伝える歴史的風致をつくりだしている。

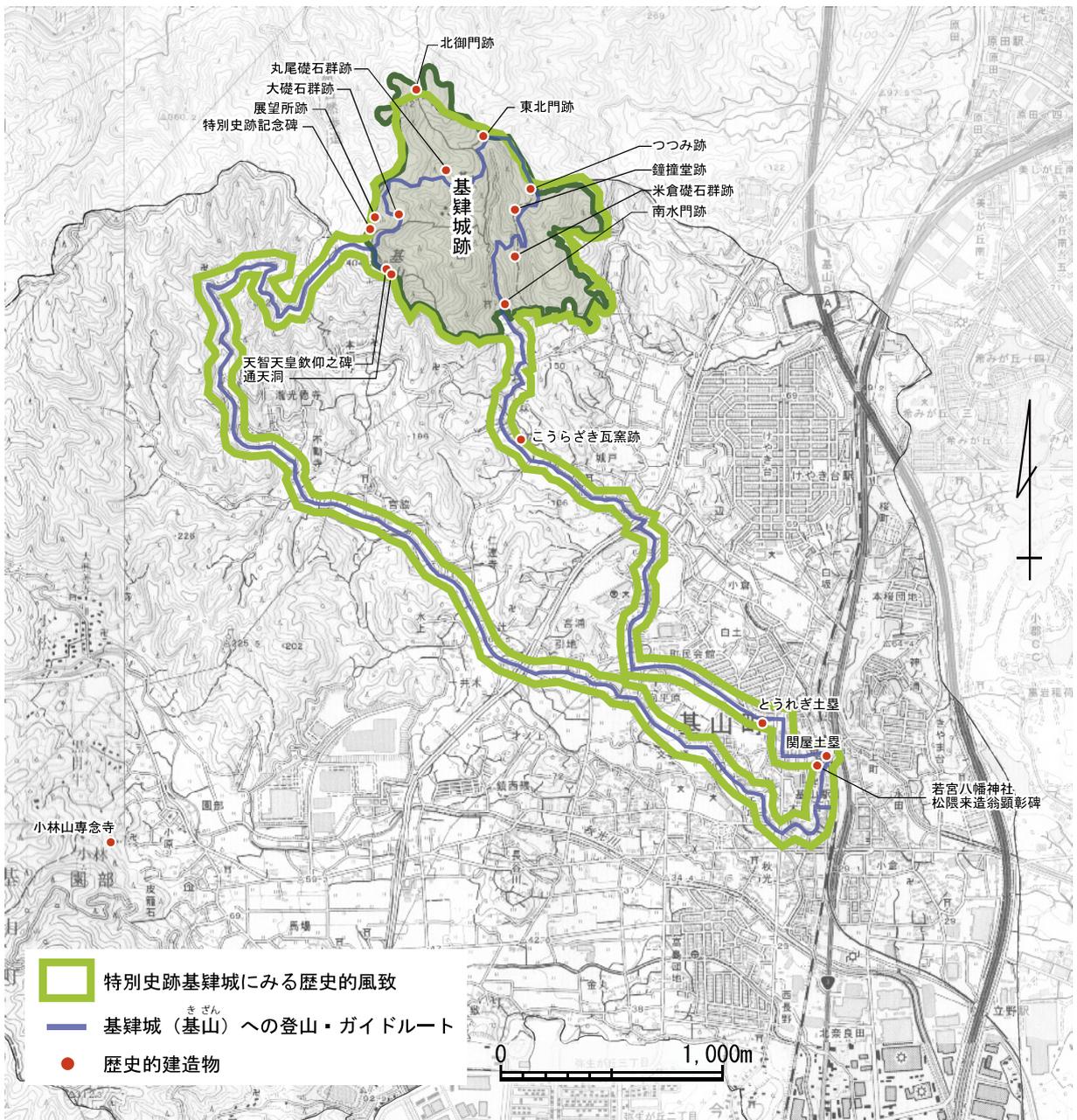


図 特別史跡基肄城跡にみる歴史的風致

2) 信仰の山・基山にみる歴史的風致

①信仰の山・基山に関わる建造物と環境

ア) 荒穂の神信仰に関わる建造物

【タマタマ石と荒穂神社】

タマタマ石は、花崗岩の巨石で、360°遙か遠くまで見渡せる基山の山頂にあり、高齢の人々には「玉姫さま」と呼ばれている。

第37代孝徳天皇の御代(645～654)に建てられた荒穂神社は、現在は基山山麓に鎮座しているが、当初は山頂にあり、自然神・産霊神が祀られていた。その神々の磐座がこのタマタマ石であったと伝わる。社殿はその後、戦国の戦火にかかり、転々とした後に貞享2年(1685)に現在地に造られた。自然神的性格である荒穂大明神が祀られ、祖霊信仰も行われていた。

タマタマ石と荒穂神社との結びつきは、荒穂神社の一の鳥居(昭和3年(1928)建立)から社殿方向を見ると、社殿とその真後ろの山頂のタマタマ石とが一直線に並ぶことに気付き、この地が選ばれ建てられたことが頷ける。祭神は荒穂大明神、瓊瓊杵尊、他六社。樹齢1200年の大楠や檜に囲まれた社殿は、三間社流造の銅板葺き。拝殿は、入母屋造で千鳥破風が付き、いずれも落ち着いた色合いの中にも、細かい細工を施した格式高い造りである。『基山町史資料編』では、虹梁の絵様式や建物の構造から安政5年(1858)頃に建てられたと考えられている。

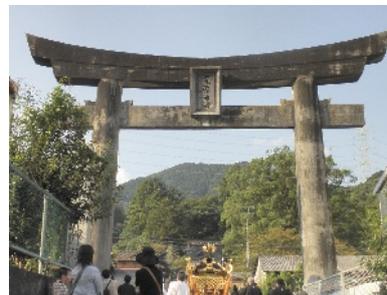


写真 荒穂神社と基山

イ) ガンジョウジに関わる建造物

【住吉神社】

基山に最も近い丸林集落を越え、急な坂道を上ると、追分石が置かれた道分かれにたどり着く。そこには、「左筒の志をひむさし右はるだ」と記された追分石が置かれ、町内からお潮井を採水・採砂するため登ってくる人々に道案内をしてくれている。

追分に従い、左の道を登っていくと、木々を揺らす風に乗れ、水音が聞こえてくる。古木に囲まれたほの暗い平場に、基肆城築造当時のままの南水門と石墨石墨の一部は平成27年(2015)に修復)がどっしりと構えている。小さな子どもなら、立ったままぐれるほどの大きな水門より、水がとうとうと流れ、下流に暮らす人々の生活を潤し続けている。この水門が城外へ流れ出た場所に、清めの潮井を採るための石段が二ヶ所設けられ、上段の石段からは水門から流れ出る水を、下段の石段からは砂を採ることができるようになっている。

この特別史跡基肆城跡の南水門に隣接して住吉神社があり、丸林集落の人々で守られてきた。住吉神社の勧請年は不詳ではあるが、天明4申辰年(1784)の石製祠があり、現在に残る建物の築造は江戸時代に遡ると考えられている。住吉三神(底筒男命、中筒男命、表筒男命)が祀られることから、地域の人々は水門から流れる川を筒川と称している。海の神である住吉三神は、その意が転じ水の神とし、水門から流れる水を汲むお潮井採りの際にも必



写真 追分石



写真 住吉神社



写真 南水門のお潮井採り場

ず手を合わせ参られている。追分石が示す「左 筒の志をひ」の「筒」は住吉三神に共通する「筒」に由来し、「志をひ」は、お潮井採りの場が左手、すなわち住吉神社とともにある南水門であることを伝えている。この南水門がある場合は、自然と石塁の威厳と神社の持つ尊厳が重なり合う空間をつくり出している。

はやたかてんじんじや
【隼鷹天神社】

本町の西寄りの山からその東に広がる田園との境の小原集落に隼鷹天神社がある。祭神は高皇産靈神^{たかみむすびのかみ}。創建年は不明であるが、『基肄郡上郷神社記録』に記されていることから、正徳6年(1716)には建てられていたと思われる。社殿建立年は、社殿に残る棟札から天保14年(1843)以前建築とされ、昭和29年(1954)に屋根瓦替え、平成5年(1993)に改修がなされている。屋根は入母屋造りで向背を前面に伸ばし、神像安置の面以外の三方が吹き抜けで、人々が上がりやすくなっている。祭りや、お潮井採りの前後にはこの社殿にゴザを敷き、小原の人々が車座になってお茶を飲み集う姿が見られる。



写真 隼鷹天神社

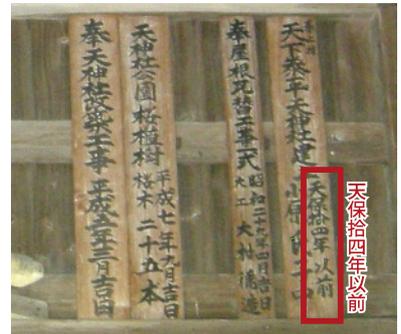


写真 隼鷹天神社棟札

【城戸老松神社】

城戸老松神社は、水門から流れる筒川に面する城戸集落の中央に位置している。境内は、昭和7年(1932)に造られた頑丈な石垣で囲まれ、その下を豊かに流れる川に掛かる石橋を渡って境内に入る。祭神は老松大明神(菅原道真公)他5社。寛和元年(985)に山城国北野より勧請されたと伝えられる。神殿と拝殿は19世紀末期頃のもので、拝殿は境内にある「老松神社 拝殿建築寄附」の石碑に「明治廿九年建立」とあることから、明治29年(1896)頃に建立されたと思われる。拝殿軒下には、龍が巻き付いた剣や、亀、菊、蝶などの珍しい彫刻が施されている。社殿右奥には、古墳の石室がぽっかりと口を開け、中には、粗末にはできない神仏関係のお札などが入れられており、この境内で行われる1月のホンゲンギョウの際に燃やされる。



写真 城戸老松神社

ながやもん
【天本家長屋門】

天本家住宅は、基肄城跡南水門の真下の丸林集落にある。家々が山肌の勾配に合わせて並び、その真ん中に走る道は、車が一台しか通れないほど細く、曲がりくねっている。初めて行った人は、行き止まりかと見間違う急カーブに沿って、天本家の大正時代に建てられた長屋門が堂々とした姿で立っている。木造二階建てで、屋根は切妻造り平入りで、中央に出入口が造られ、柱を表面に出す真壁造りの土壁の上に白漆喰にて化粧されている。石製の二段基礎を巡らすなど、農家建築の中でも丁寧な造りとなっている。今は納屋として使われているが、昔は農作業の男衆が寝泊まりしていたと言う。



写真 天本家長屋門

ウ) ガンジョウジに関わる町並み

本町のガンジョウジでは様々な祭事が行われている。その中に町内の神社を主な舞台とし、町内に点在するお潮井採りの場へのおつとめを行い、集落を清めるために採取したお潮井を集落内に撒いていく行為や、農村への災い除けとして入口に疫神を置くガンジョウジがある。都市的な町場と村落的な農村風景が混在する本町にあって、主として農村的景観の中で、農耕祭事として営まれており、その多くが、田畑が近接するお宮の中で催行され、『元禄絵図』にも描かれている旧集落の範囲を、潮井を撒く範囲、疫神を置く範囲として催行されていた。現在も、この範囲は催行者に認識されつつ、その時々のおつとめは継続されている。



写真 丸林集落の町並み

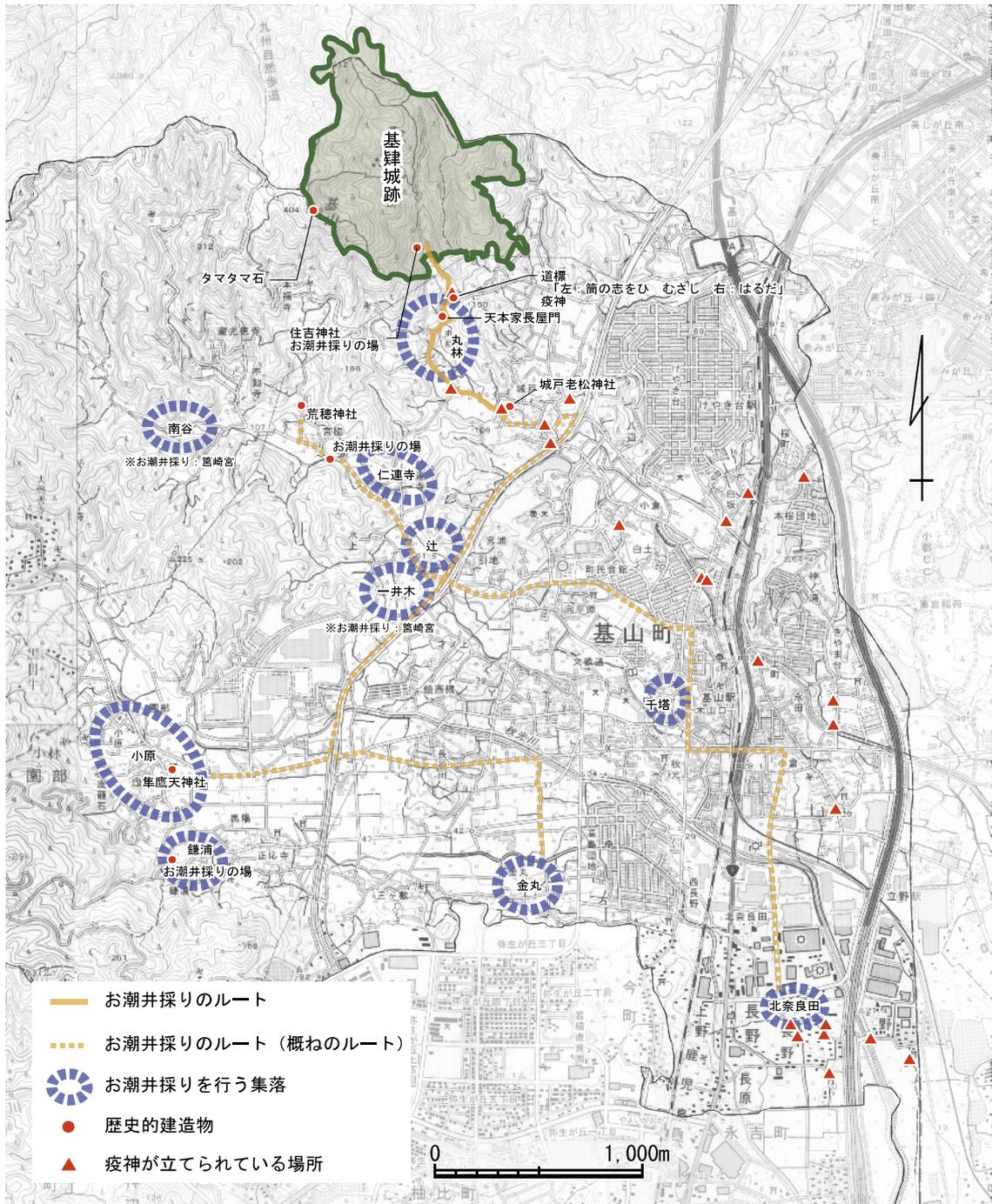


図 信仰の山・基山に関わる建造物と環境

② 信仰の山・基山に対する信仰活動

ア) 荒穂の神信仰に関わる堂回り

荒穂神社の氏子は、町内4ヵ所の区域に広がるが、主に旧宮浦村の人々の堅い結束の下で守り続けられている。人々は元旦から初詣後に社務所に集まり盃を交わし、一年の始まりを祝い、また、結婚、出産、七五三という大きな行事の時だけではなく、荒穂神社への参拝が日々の生活の一部となっている。9月1日には、「堂回り」の行事がある。これは、御籤占いで決まった回数分社殿の周りを回るもので、早朝より、老若男女がそれぞれで集まり、神殿前で参り、左回りで歩み、神殿の後ろで必ず基山のタマタマ石に手を合わせる姿に、タマタマ石と荒穂神社の堅い繋がりを見ることができる。この「堂回り」を催行している行政区4区の昭和58年(1983)運営委員会記録に、「夏参り(堂回り)」と記され、その年の堂回り回数が8回であることが記されている。

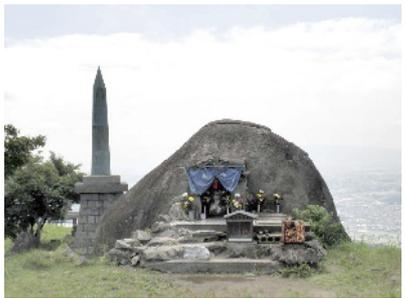


写真 荒穂神社の磐座であるタマタマ石
(現在は、どろどろまいるの札所の
一つとなっている)



写真 「堂回り」
荒穂神社神殿裏で基山を向いて拝礼



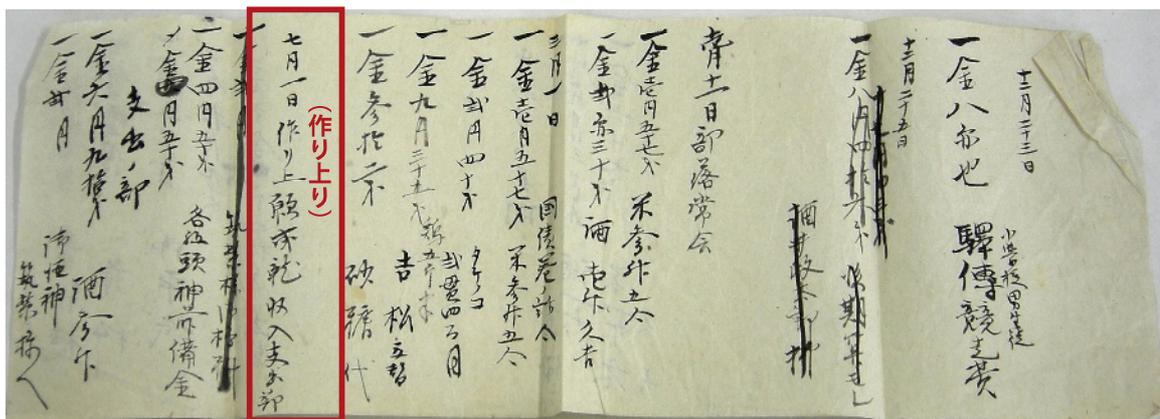
写真 御籤占いで決まった堂回りの回数
を告げる様子

イ) 基山の信仰に関わるガンジョウジ

【ガンジョウジ】

ガンジョウジは、一年の無病息災、災難除去、五穀豊穡を願い行われる行事で、町内の30ヶ所ほどの集落において催行され、その目的や催行内容は時期や集落によって異なっている。

昭和前期に記録された基山東麓にある6区の区有文書には、ガンジョウジが7月1日に行われ金銭の出し入れがあったことが記されており、古くから継承された行事であることを知ることができる。



資料 6区々有文書(昭和前期)

本町の南西に位置する小原集落にある隼鷹天神社は、田園風景の中に鎮座する。ここで行われるガンジョウジは、田植え後の7月の間中に五穀豊穡、無病息災などの願掛けが行われる。そして、8月1日に願明けのお潮井採りが行われており、そのお潮井採りの行先を占うための日が設けられ、お潮井採りの場を御籤によって決める行事が行われている。

お潮井採りの場を決める日は、いつもは閉められている神殿の格子が開けられ、神像が優しく顔を覗かせている。その前にはろうそく、線香が点され、白ご飯が供えられている。

「さあ始めましょうか。」

と、お世話人が一言静かに言って、神前に置いていた丸い盆と数珠を厳かに持ってきた。

ここは、2区小原集落の真ん中にある隼鷹天神の社殿の上、三方吹き抜けの社殿に夕闇が迫る7月の夕方、小原集落の人々が見守る中で占いが始まる。

丸盆には小さく折り畳まれた白い御籤が4つ載っている。皆でお参りをした後、お世話人がその上を数珠の房で撫でると、不思議なことに一つの御籤だけが房に付いてきた。

開くと「水門」と書いてある。「水門」とは特別史跡基肆城跡にある南水門を意味している。緊張していた場が一瞬で和み、「今年は水門たいね。」「水門ばかり続くねー。」など色々な声が飛び交う。行先は、「久留米の高良山」「太宰府天満宮」「水門」「隼鷹天神でお百度参り」の4つ。今年が一番近い水門が選ばれてほっとした雰囲気にも包まれる中、神前に供えていたオゴクさん（白飯）とお神酒が下げられ、皆に振る舞われる。同じ集落に居ながらも、互いに忙しい日々で顔を合わせないためか「久しぶりやったね。」「どげんしとったね。」と近況報告から会話が弾む。いつの間にかすっかり日が落ちた。裸電球の柔らかな光の下、円座になって頭を付き合わせた人々の話声や笑声が、真っ暗闇になった境内にいつまでも響いていた。



写真 ガンジョウジの様子

この占いの翌日から小原集落の人々は、7月中は毎日、早朝より隼鷹天神に願掛けのお参りをする。以前は『お茶わかし』と言って、お茶やお菓子、漬物を用意して参拝者を迎える当番も決まっておられ、子どもたちもラジオ体操をした後、社殿でお茶やお菓子をもらって夏の朝を楽しんでいたが、現在はそのお茶わかしは1日、15日、25日の3回と回数が減りつつも、今も続けられている。

基山に関わるガンジョウジは、他に基山東麓にある丸林集落で行われる「火事のガンジョウジ」がある。この「火事のガンジョウジ」は、集落や特別史跡基肆城跡がある基山が火事にならないようにと願をかけるもので、1月3日に丸林集落内の弁財天の小さなお堂に酒の肴を持って集まり、お酒を飲む。お酒が終える（無くなる）まで帰れないという。

○お潮井採り

ガンジョウジに付帯して行われるのが、お潮井採りである。

基山町内では、各集落のお浄めを目的として、お潮井採りが行われている。お潮井採りとは、清められた砂や水を集落内の道、家々の玄関や敷地、また所により出かける際に足元に掛け、災いを払い一日の無事を願う風習として行われている。

町内のお潮井採りの場は、荒穂神社大しめ縄が掛けられる潮（塩）井川をはじめ数ヶ所あり、その中の一つが特別史跡基肆城跡にある南水門である。

小原集落の隼鷹天神社のガンジョウジでは、8月1日の早朝、お礼参りと称して御籤で引き当てた場所にお潮井を採りに行く。出勤前のワイシャツ姿のサラリーマン、ご年配の人々もござっぱりした姿で向かう。両親の腕を引いて来られる方、おばあちゃん、お父さんに連れられて来た坊主頭の中学生、足の不自由な父親に砂を取らせようと、汗だくとなって助けている息子さんもいる。どのお顔も晴れ晴れとしている。

お潮井の砂を頂くと、隼鷹天神に戻り、お参りをして境内にお潮井（砂）を撒く。その後社殿に上がり、また皆で円座になって、広げられた漬物を摘みながらお茶を飲み、無事に願掛けが終わったことを喜ぶ。「戦争中も絶えなかったです。」と年長者が言った。守り続けてきた誇りがその声に秘められている。



写真 隼鷹天神社直会



写真 お潮井採り【水門】



写真 お潮井採り【水門】



写真 お潮井採り【水門】



写真 お潮井でお清め【隼鷹天神社】



写真 御神饌【隼鷹天神社】

基山の東麓、丸林集落では毎日、輪番制によって基肄城跡南水門からお潮井としての水を採水し、採水者の家の周囲に撒くことで、清浄を保つ行事が行われている。

早朝、当番にあたる家人が、住吉神社横にある特別史跡基肄城跡の南水門へ、手桶を携えお潮井採りへ出向く。基山の持つ神聖性を汲み取る場として、採水のための石段が設けられ、水門からの採水が行われている。採水のための階段を上り、水門から流れ出る水を手桶に入れ、取水した水に対して神聖性を付与するがごとく慶応3年(1867)寄進石製鳥居をくぐり、天明4年(1784)建立の住吉神社の石製神殿前に置き住吉の神に拝する。

その後、お潮井水を散水する際の柄杓替わりとするため住吉神社前の^{さかき}榊を一枝採り、採水した桶、榊一枝を持ち、1kmあまり下ったところにある城戸の老松神社まで参宮する。城戸の老松神社では、明治35年(1902)寄進の石製鳥居をくぐり、明治29年(1896)頃建築とされる神殿、拝殿へたどりつくくと、拝殿前に手桶を置き、住吉神社参拝時と同じように神聖性を付与するために一拝する。その後、家に戻り、玄関、門そして通りへお潮井水を散水し災いを払う。散水後、次の当番家の玄関先へ手桶を置き、お潮井当番が終わる。

かつては、丸林集落全体の家々をまわり、お潮井水を散水し集落への^{じやまはら}邪気祓いを行っていた。『元禄絵図』に描かれ今も残る集落の中の道、大正年間建築と伝えられる天本家長屋門をはじめ昔ながらの農村景観をとどめる丸林集落では、お潮井水散水の歴史的風致が今もなお続けられている。



写真 南水門から採水



写真 神殿前にて参拝



写真 榊を採る



写真 老松神社へ参拝



写真 長屋門ほかにお潮井を撒く



写真 次の当番宅へ

○疫神

梅雨空の下、町に広がる田が小さな苗で緑に染まる頃、町内のあちらこちらの集落の出入り口にお札を挟んだ竹や、疫神と呼ばれる^{いんわら}稲藁製のたわしを逆さにし、竹の棒に差し込んだものが、基山の各集落の入口に立てられている。竹の棒にはお札が付けられ、集落内に悪いものが入らないようにと、町域の多くの場で田植えが終わった「ガンジョウジ」の時期と併せて立てられ、現在は7つの集落で続けられている。疫神は、6月に作られ7月に立てられる。疫神は、棒状のものとたわしの様につくられるものがあり、後者は藁たわしで災いを掃き出すという意味を持ち、お札を貼ることで威神力を高めている。現在では、各集落へ新しい道が通っているが、疫神の多くは旧道が集落へ入る箇所を立てられており、旧道と集落の^{みい}関係を知る上でも貴重な存在となっている。

疫神の風習は、基肄郡、養父郡や御井郡などで確認され、遠くは熊本県までその分布を見ることができる。



写真 城戸集落に立つ疫神



写真 丸林集落に立つ疫神

③まとめ

町内のどこからもその姿を見ることのできる^{きざん}基山は、人々の生活の一部であり、心の拠り所である。山にかかる雲で天気分かり、山の色で季節を感じる。毎日のように登る人にとっては、健康維持の山であり、悩み事を抱えた人はその心を晴らす場所でもある。

また、故郷を離れる人にとっては、古里を思い出す特別な山であり、古くから、^{きざん}基山山頂のタマタマ石を初め、南水門の住吉神社、山麓の荒穂神社は多くの人々の信仰の対象となっている。

また、それぞれの呼び名は異なるが、ガンジョウジは地域の^{あんない}安寧を願い行われる、町民にとっては先祖から受け継いできた行事である。このガンジョウジではお潮井採りがなされ、本町では2種類に分けられる。一つは祭事に神様が神幸する道を清めるもの。もう一つは家や氏神さまの敷地を定期的に清めるものである。お潮井は、水と川砂があり、行事によって異なり、使い分けられている。主な神社には必ずお潮井台があり、奉納されるお潮井を載せる役割と、家の敷地に撒くために、そこからお潮井を頂く人に提供する役割の両方を兼ねている。基山のお膝元の丸林集落で毎日行われるお潮井採り、稲の豊作を願って行われる小原集落の隼鷹天神社など、お潮井採りは長い年月、人々の日常の生活の一部として行われており、その催行の場はしっかりと歴史的風致を作り出している。

3) 教育鍛錬の山・基山^{きざん}にみる歴史的風致

①教育鍛錬の山・基山^{きざん}に関わる建造物

ア) 登山道

基山^{きざん}への登山道の一部は『旧蹟全図南』(文化9年(1813)写)や『元禄絵図』に、萩原越えの道として数条の道が描かれていることから江戸時代の元禄期(1688～1703)までには形成され、人々の通行があったことがうかがえる。特に『元禄絵図』は、現在の地図との照合が容易であり、その完成度は高い。これら江戸時代に描かれた道が現存し、写真からも、少なくとも昭和28年(1953)には、これらの道を使って基山町内の小中学生は基山への登山を行っていることがわかる。また、後述する草スキーを催行する人々の活用する道とも重なっており、山頂に設けられた出店への荷運びの道ともなっていた。

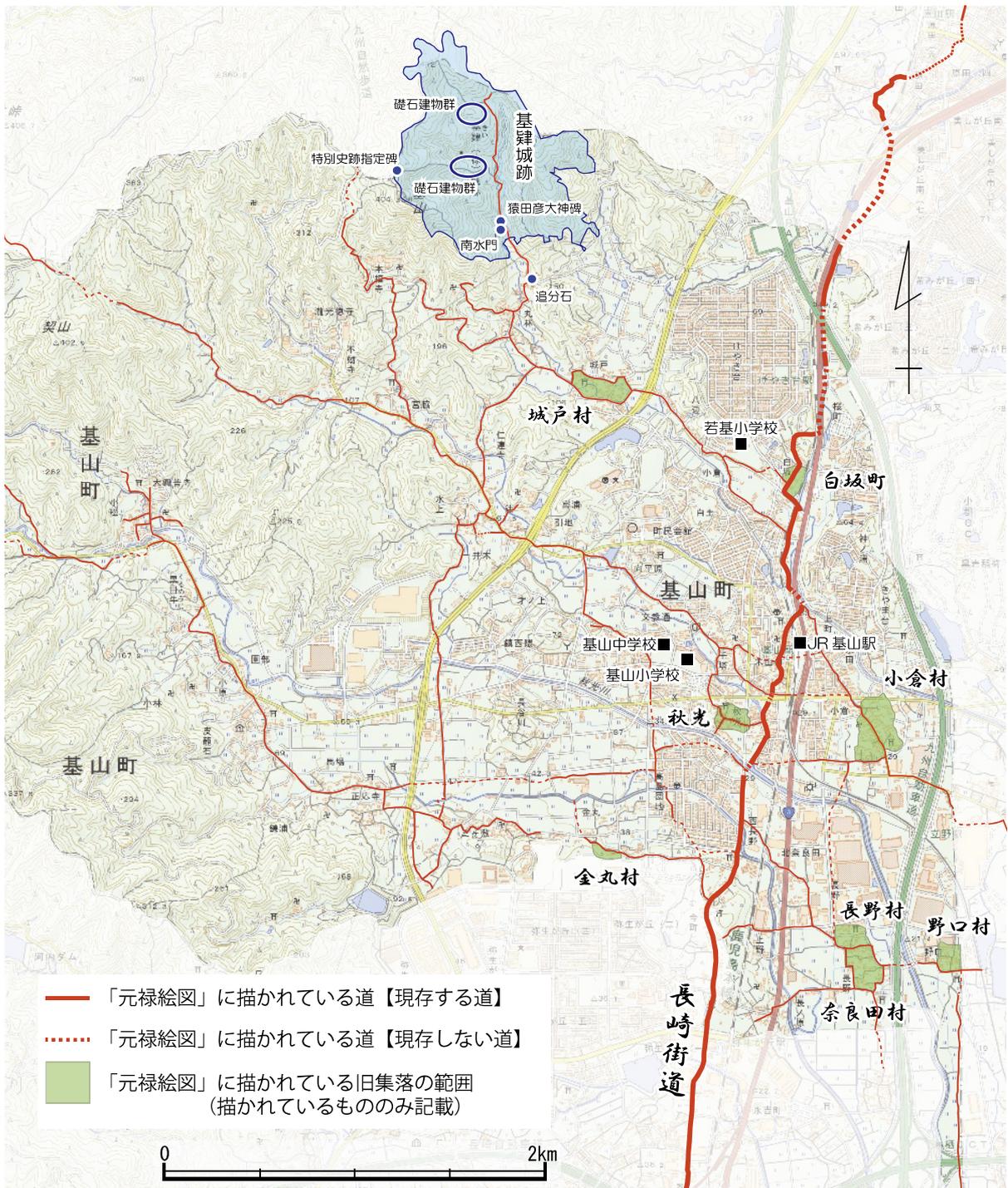
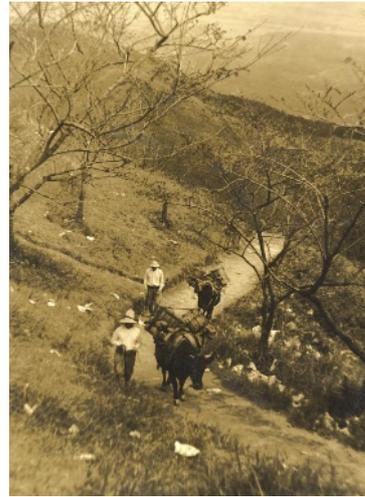


図 『元禄絵図』の道が残る基山町



資料左 登山道 / 基山中学生の基山遠足 昭和 28 年 (1953)

資料右 登山道 / 山頂売店への荷揚げ 昭和 28 年 (1953)



イ) 草スキー場

草スキー場は、昭和 13 年 (1938) に刊行された『基山郷土読本』にも記され、当時からスキー場として整備されていたことが分かる。

毎年、草スキーを楽しむ人々の安全を祈り草スキーの季節にむけて雑草の抜き取り、芝の植え替えが行われ、維持管理の手が入られる。昭和 30 年代の場内写真では雑木の繁茂がみられないが、現況写真と比較すると、手が増えられていない空間の雑林化が進行しており、草スキー場の空間確保に人の手が必要であることが分かる。草スキーの期間が終わる晩秋には、多くの人々が滑ることで地盤がむき出しになり劣化した箇所へ、危険防止を兼ねて凹凸を平らに均し新たな芝が充填されるとともに、人の踏みみを避けるように縄張りがなされる。この補修が功を奏して、毎年無事に人々を迎え入れることができている。



資料 基山の草スキー場 (昭和 30 年)



写真 基山の草スキー場芝養生の様子

②教育鍛錬の山・基山で行われる行事

ア) 登山

特別史跡基肆城跡がある山 基山は、町外の人々にも親しまれ、最寄りの駅である JR 基山駅や JR けやき台駅より徒歩で基肆城跡の水門跡や基山山頂に向かう登山客をよく見かける。JR 基山駅を使用する登山客は 1 日あたり、平日 10 名程度、土日は 20 ～ 30 名程度の団体客が見かけられる。また、アクセスが容易であるとして町内の小中学校はもとより、町外の小学校から高等学校までの遠足客が列をなして楽しそうに基山に向かう風景を度々見ることができる。

登山する人々は、大正 8 年 (1919) に史跡指定のための調査が本格化すると、基肆城がある山として基山への登山客が急増し、史跡指定を受けた昭和 12 (1937) には当時の基山駅駅長談話で、「基山登山のために増えた昇降客数が 10 万人以上に上る」と『肥前史談』第 12 巻第 6 号に久保山善映氏によって記されており、特別史跡が位置する山として基山が歴史的にも社会的にも認められていく。

また、国道3号沿いに基山^{きざん}への登山口であることを物語るように、基山^{きざん}の玄関口である城戸集落^{きど}へ向かう交差点名に「基山登山口」、その近くのJR踏切に「基山登山口踏切」と表記されている。

記録をたどると昭和前期から現在まで、町内の小学生は新入生の歓迎遠足、卒業生のお別れ遠足時に基山^{きざん}へ登る。本町東部域の平野に位置する町内の小中学校から、基山^{きざん}を目指して歩いていく。子どもたちが歩く道は、『元禄絵図』にも描かれている旧道をたどり、城戸・丸林の農村景観の中を登っていく。丸林集落の細い道沿いには大正年間建築の長屋門や住宅が立ち並び、中には牛舎や馬屋もあるなど、昭和以前の農家の雰囲気を感じながら登ることができる。集落を登りつめると、そこには集落の守り神である疫神と「左 筒の志をひ むさし、右 はるだ」の追分石がある分かれへとたどりつく。追分記す「左 筒の志をひ むさし」に従い左手へ登っていくと、基肆城跡の南の入口である南水門を抱く石垣が立ちはだかるように聳^{そび}えている。ここでは、緑豊かな山の雰囲気と古代の山城としての威厳、さらにはお潮井採りの場としての住吉神社の神秘さが重なり合い、本町の象徴としての基山^{きざん}への導入景観をつくりだしている。南水門を通り基山^{きざん}へ踏み入ると、そこには『元禄絵図』や『旧蹟全図南』にも描かれる旧道であることを物語るように、道しるべの神としての猿田彦大神碑^{さるたひこおおかみ}が建つ。大神碑を左に見つつ山道へと歩みを進めると、いよいよ急勾配の山道へと左へ折れる。ほどなく礎石建物群が登山道の両側に見え、特別史跡基肆城跡の存在を再び感じることになる。礎石建物群のなかを登りつつここに建っていた瓦葺きの倉庫群を想像し、山頂目指してラストスパート。森の中を抜け、最後の急勾配の山道を登ると草原を思わせる山頂にたどり着く。そこには昭和40年(1965)建立の「特別史跡基肆城跡」の史跡標石^{さび}が聳えるとともに、筑紫平野を一望できる眺望景観が広がり、登ってきた子どもたちは一様に歓声をあげる。山城にある道の険しさ故に、草原広がる山頂の清々^{すがすが}しさに感動を覚える。基山^{きざん}の子どもの伝統行事として定着している基山^{きざん}への遠足では、昔ながらの光景が現在も続いている。



写真 国道3号にある基山登山口交差点



資料 基山遠足の様子(昭和30年)



資料 基山山頂での遠足の様子(昭和30年)



写真 基肆城水門跡へ向かう登山者



資料 基山遠足の様子(平成27年)

子どもたちのみならず登山者の多くがこの感動を覚え、四季を問わず多くの人々が山頂を目指して何度も登ってきている。

近年では、手軽に登れる山として、日々の登山や初日の出を拝むための登山、さらには福岡都市圏にあっては近隣の山ということもあり、民間企業によるウォーキングイベントで一日で千名近くも登山し基肄城跡を体感している。



写真 初日の出



写真 民間団体ウォーキングイベント

そして山頂にたどり着くと、皆一様に、山頂からの眺めに感嘆し、疲れを癒している。この眺めこそ、『日本書紀』に残る大宰府の防衛施設として求められた眺望であり、かつての活動を今も体感できる。

山頂の爽快な眺めを楽しんだ後、お弁当を広げる人々、休憩し一息つく人、そして草スキーに興じる人、それぞれの時間を過ごし、山を後にする。子ども達の遠足では、山頂で解散となり、山頂を基点として二手に分かれ下山する。一つは、登山してきた道を下りる者、もう一つは、南方面、荒穂神社方面へ下る道である。山頂から駆け降りるかのように基山南斜面の道を下り、荒穂神社へと至る。さらに南に住む子供たちは、明治25年(1892)建立の追分地藏尊を右手に見つつ、明治25年(1892)3月建立の「左小松観世音道」と刻銘された石碑が残る大興善寺までの道を越え、自らが住まう集落へと帰っていく。



写真 追分地藏尊



写真 台座に刻まれた追分文



写真 大興善寺北東に残る基山から大興禅寺までの道しるべ(願主 玉岡誓恩)

イ) 草スキー

基山^{きざん}を特徴づけるものとして、町内外の人々が口を揃えて語るのが草スキーである(本町では、木製のソリで滑ることを草スキーと呼んでいる)。昭和13年(1938)に発刊された『基山郷土読本』にも記され、現在も初夏から晩秋にかけて多くの人たちが訪れている。草スキー場がある斜面頂部には、基肆城跡の土塁が聳え立ち、急峻な斜面をさらに際立たせている。

草スキーは、木製のソリ部に座るための板を固定する簡単なもので、かつては子どもたちの必需品であった。小学校の基山遠足ともなると、「マイスキー」ならぬ「マイ木ソリ」のソリ部に蠟^{ろう}を塗り、滑りやすさを高め担いで登っていた。遠足の弁当を食べるやいなや、自分で用意した木ソリを抱え、太宰府が見える小高い丘に登り、太宰府側を背にスタートする。もちろん友達と競うことも忘れない。今ではプラスチック製のソリを使う町外の人々を目にするが、草スキーの命の一つでもある芝が焼け枯れていくため、木ソリの貸し出しを行い、芝保護への協力を求めている。

草スキー場として多くの人々が詰めかけていた昭和30年代から40年代頃は、基山^{きざん}山頂に売店小屋が建てられ、多くの若者が集い、草スキーやダンス、時には語らいの場として利用されていた。昭和28年(1953)に観光資源化されていた基肆城跡は、多くの人々が集う場として活用されており、今に続いている。



写真 草スキー(のぼり)の様子(現代)



写真 草スキー(くだり)の様子(現代)



資料 草スキーの様子(昭和30年)



資料 雪スキーの様子(昭和30年)



資料 貸出用草スキー用木ソリ(昭和29年)



資料 頂上の売店の様子(昭和30年)

※草スキーを滑るためには、今も変わらずソリを持って上がって行かなくてはならない。

基山^{きざん}には草スキー場があるという記憶を持つ人々は、隣県の福岡県にも広がり、平成26年(2014)に草スキープレ大会を実施し、平成27年(2015)には基肆城築造1350年を記念した草スキー大会を開始した。平成28年(2016)には第1回草守基肆^{くさすきい}世界大会へと発展し、6ヶ国161人の人々が参加し、勢いよく滑る草スキーの爽快さを体感している。令和6年(2024)にはSAGA2024デモンストレーションスポーツ(草スキー)大会が開催され、7ヶ国331人が参加するまでになっている。

この草スキー場は、昭和30年代頃、雪スキー場としても多くの人々が訪れてた。町民の中には、基山^{きざん}のスキー場から現在の基山駅までスキーで滑り下りていたと語る町民もいる。



写真 SAGA2024 デモンストレーションスポーツの様子



写真 第1回草守基肄世界大会(平成28年(2016))



写真 第2回草守基肄世界大会(平成29年(2017))

③まとめ

町民にとって基山は、子どもの頃から遠足の間であり、草スキー場であり、そして体力づくりの山として何度も訪れる親しみ深い山である。自らの家から、時には学校から、そして来訪者は駅から街の喧騒を抜け、水田地帯の中を進み、そして緑豊かな基山へとたどり着く。目的は多様化するけれども、町民にとって鍛錬の場であると同時に、ここかしこに点在する特別史跡基肄城跡を象徴する建造物群は、教育の場としての役割を持ち、踏み入る人々に教育鍛錬の山・基山の歴史的風致を感じさせる。

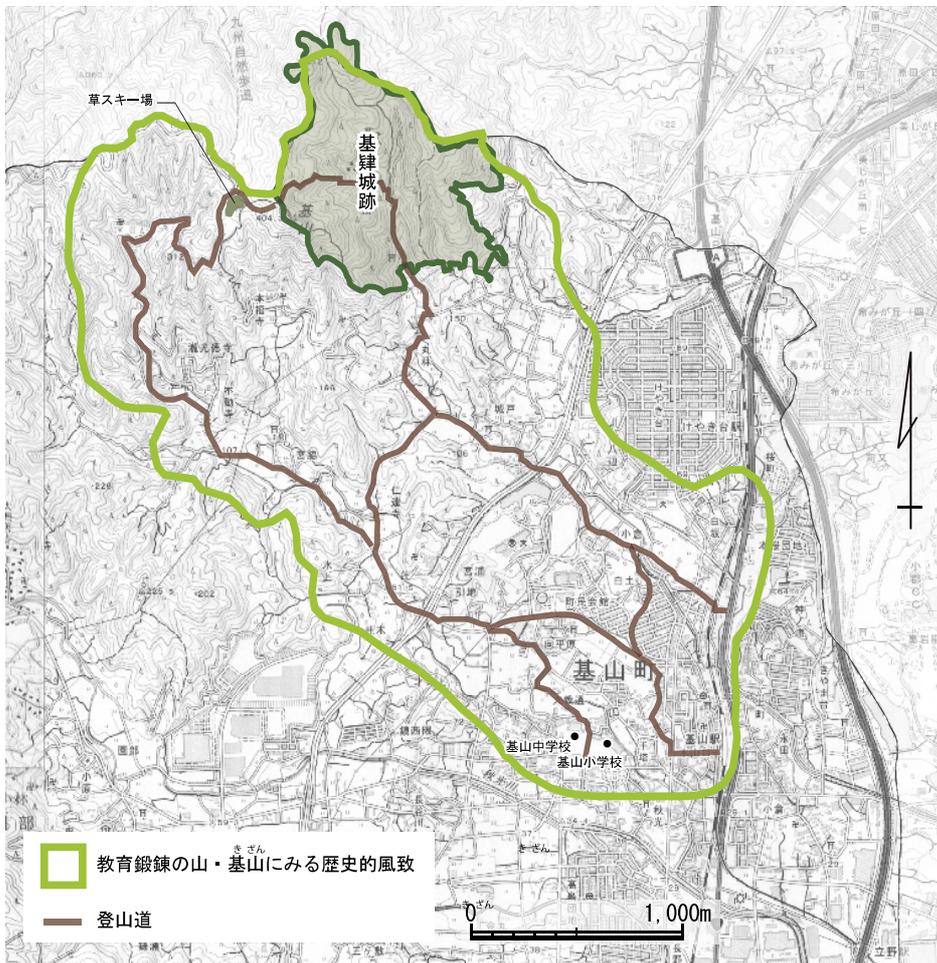


図 教育鍛錬の山・基山にみる歴史的風致

【コラム】 荒穂の神信仰

基山^{きざん}の南麓に鎮座する荒穂神社の記録上の初見は、平安時代の歴史書「日本三代実録」の貞観2年(860)の条に「二月八日 従五位上^{じゆうごみじょう}の荒穂天神^{しろうごみげ}に正五位下^{せいごみげ}を授ける。」とある。

「従五位上」「正五位下」とは、役人の階位のこと、奈良時代以降は神階にも使われるようになった。この、荒穂天神に授けられた「正五位下」は、地方役人而言えば、最高位の一つ下の位のこと、荒穂天神の格式を表現するとともに、平安王朝が正式に認めた式内社の一つとすることが、この記録から見るができる。その後、平安時代成立の『延喜式』『色葉字類抄』に荒穂神社の名が見える。基山^{きざん}が基肄城とともに認められていたことを知る事ができる。

荒穂神社の御祭神は瓊瓊杵尊とされているが、奈良時代前期に記載されたとされる『肥前国風土記』の断片的記録である「逸文」には、「・・・(前略)・・・、筑後国は、本、筑前国とあわせて一つの国とありき。昔、このふたつの国の山に峻しく狭き坂ありて、往来の人、罵れる所の鞍鞆を摩り尽されき。・・・(中略)・・・。昔、此の堺の上に荒ぶる^{あらぶる}神有り、往来の人、半は生き、半は死にき。・・・(中略)・・・。筑紫君^{ひのきみ}・肥君等占へて、筑紫君等が祖甕依姫を祝と為して祭らしめき。尔より以降、路行く人、神に害はれず。・・・。」(解釈：筑後国は元は筑前国と合わせて一つの国(筑紫国)で、筑前と筑後の国を分かつ山が険しく、この地に荒ぶる神がおり、生きて通るもの、死して通るもの半々という場所であった。そこで、筑紫君と肥君らが占い、祖甕依姫を祀ることで、鎮めることができた。)とあり、この云い伝えを残す筑紫神社が隣町である筑紫野市原田にある。本町は筑肥の境、肥の国の北東鬼門^{きもん}に位置することから荒ぶる神が居たと云い伝えられ、この荒ぶる神が居た場こそ、基山^{きざん}であると荒穂神社に残る記録に記されている(『縣社昇格出願書類』昭和3(1928)年)。

この荒ぶる神を鎮めるために肥前側で建立されたのが荒穂神社であり、その磐座としてタマタマ石^{たまたま}が基山山頂に鎮座している。

この時から、基肄城がある山 基山^{きざん}は神宿る山^{かみやど}として崇められ、神聖性が付与され荒穂大明神を祀る社^{やしろ}として今に至っている。

【コラム】町域で行われているガンジョウジ

[様々なガンジョウジ]

鎌浦集落のガンジョウジは、「昔疫病が流行り筑紫氏のたたりではないかと碑を建て供養したと聞き、物心付いた頃には参加していた。」と長老が語る「おとさガンジョウジ」である。「おとさガンジョウジ」は、集落の山頂にある、勝尾城主の筑紫広門ら筑紫一族の供養碑に参るもので、「おとさ」とはお殿様が訛ったものと言われている。ここに出てくる筑紫広門は、鳥栖市の城山に在った勝尾城を本拠に活躍した戦国時代の武将で、筑紫家の位牌は本町の小林山専念寺にあり、本町と深い縁を持っている。この供養碑には、阿弥陀如来を表す梵字が大きく彫られ、右肩には「天正十四■戌七月■■■」（天正 14 = 1586 年）、左下に「筑紫大将弘門」とある。弘門は広門の間違いと思われる。年号から、広門（1556 ~ 1623）が存命中に建てたと考えられ、後にガンジョウジとして供養が始められたのではないかなと思われる。「おとさガンジョウジ」がいつの頃から始まったのは定かではないが、長老が生きていたら 92 歳を越す年なので、すでに 100 年は続けられている。

柿原集落では、毎年 7 月に集まり、昭和 55 年 7 月 13 日に柿原で起こった山津波を忘れないようにと始まったとされる「あわまきガンジョウジ」などもある。

他に区や集落によってこの名称は異なるが、田植えが終わり、氏神さまに稲の豊作を祈願する「苗代ガンジョウジ」「つくりあがりのガンジョウジ」「さなぼりガンジョウジ」がある。また、稲穂が出だす時期の「田ほめガンジョウジ」は、9 月 1 日に田んぼに行き、稲を誉める行事である。この行事では、田に酒を振り掛けながら、「よ~できてくれなさった。」と大声で言って稲の苦勞をねぎらう。いずれも、その集落の人々が集まり祈るとともに、老若男女で集うふれあいの場となっている。

[お潮井採り]

ガンジョウジに伴って行われるお潮井採りは、小原集落のように、水門にお潮井（砂）を取るところもあれば、鎌浦集落の「おしおいガンジョウジ」のように、石を取るところもある。鎌浦集落では田植えが終わった 7 月 1 日（現在はこれに近い休日）に、公民館横の川で石を取り、それに笹を巻き、公民館の玄関内に祀ってある毘沙門（びしゃもん）さんの足元に置くもので、9 月 1 日（現在はこれに近い休日）の「田ほめガンジョウジ」にはその石を回収して川に戻す。その後、自分の田にお酒やてんぷら、ちくわを持って行き、田を誉めながらお酒を撒き、てんぷらなどをつまみながらお酒を飲む。

7 区の北奈良田集落でもお潮井採りが行われている。田を作っている人が 7 月 1 日の早朝 5 時に集合し、うっすら明るくなりはじめた空の下、荒穂神社の南に流れる潮（塩）井川に降りて砂を採る。冷たい川の水が気持ち良い季節である。お潮井（砂）は、昔は竹で編んだ花てぼに入れていたが、今はビニール袋に入れている。一行は、そのまま荒穂神社に向う。樹齢 400 年の大楠がそびえる境内は蝉時雨に包まれ、夏の朝特有の香りが漂う。神殿に、田植えが無事に終わったことの感謝と、豊かに実りますようにと五穀豊穰を祈り、自分たちの集落の八幡神社に帰る。お参りをした後、社殿下を持って帰ってきたお潮井を置く。夕方から神社横の集会所に組合の人々で集まり、てんぷら、ちくわでお酒を飲み、田植えの慰勞をする。

【コラム】しおい

よく知られている「おしおい採り」は、博多祇園山笠の筥崎宮での「お汐井採り」である。祭事の期間の無事を願い、筥崎宮にある砂浜で夕方に真砂採りが行われることから「お汐井」と書かれる。同じく筥崎宮社日祭の折に採られる「おしおい」は、早朝行われることから「お潮井」と記される。基山町では、採集されるしおいは砂、水と地域によって様々であるが、採集時間が朝ということもあり、「汐」ではなく「潮」が用いられ、基山町内の神社境内にあるオシオイ台には「お潮井」と記されているが、木山口町にある若宮神社境内にあるオシオイ台には、「お汐井」と記されており、夕方の「シオ」が表現されている。

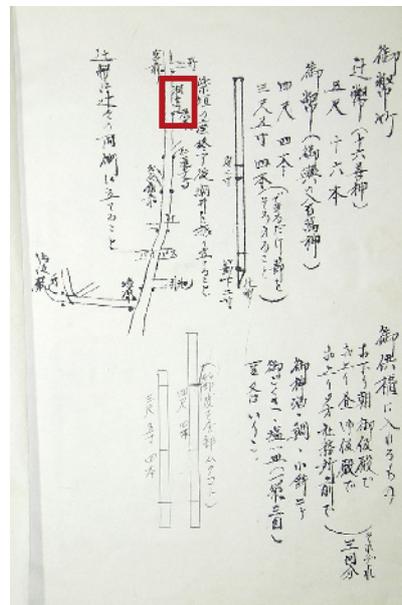
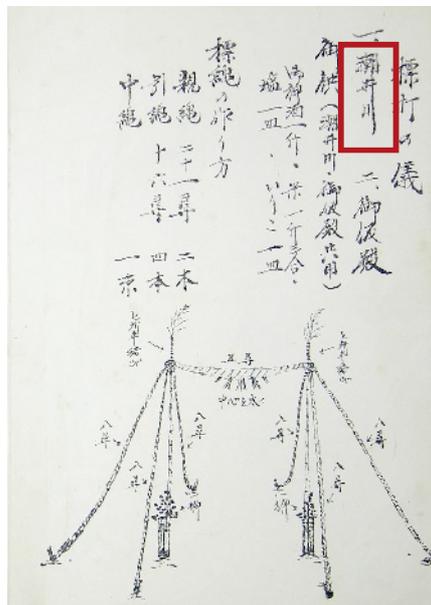


写真 荒穂神社の潮井台



写真 若宮神社の汐井台

荒穂神社の大しめ縄が掛けられる「しおい川」の名称は、現在、川に架かる橋の名称には「塩井橋」と記されているが、昭和57年の荒穂神社御神幸祭座元控には、「潮井川」と記されており、字義を伝えている。



資料 『荒穂神社御神幸祭 座元控』(昭和57年(1982))

【コラム】植林の山

現在、特別史跡基肆城跡がある基山^{きざん}は、近傍の山々と同様に樹木に覆われた緑豊かな山であるが、近代における基山^{きざん}は、農耕牛馬^{かうば}の飼葉の山として草原の山の姿を見せていた。明治30年代に入り植林事業が推奨され、基山^{きざん}でも明治41年(1908)頃より、梁井幾太郎氏(薬種業を営み産業組合を設立)による積極的な植林事業が始まる。主に梁井薬店農林部が中心となって活動し、大正天皇即位の時に基山村と一緒に記念学校林養成にも尽力している。長年にわたり下草刈いや補植^きが基山^{きざん}を舞台に展開したが、その多くの費用は梁井氏による寄付で賄われている。

本町の象徴たる基山^{きざん}には、鎮守としての荒穂神社が南麓に鎮座し、御祭神の主祭神瓊杵尊とともに、樹木の神五十猛命^{いそたけのみこと}が祀られている。五十猛命は、我が国に木々を招来させた神として知られ、昭和3年(1928)12月に県社昇格のために提出された書類に御祭神の一柱として記され、梁井氏による基山植林事業は、町域に山は数あれど、基山^{きざん}が選択された理由でもあった。

毎年、草木の冬枯れの季節になると、基山^{きざん}山頂一帯では土塁保護と山火事対策のための山焼きが行われる。基山^{きざん}山頂から北帯^{きたみかど}と呼ばれる北峰までの全長約700mの間に、生い茂った草を切り、焼く。かつては、草原であった基山^{きざん}では、登山者の火の不始末から山火事が頻発し、土塁上に木々が生い茂るのを防ぐとともに、万が一山火事が発生した場合に延焼を防ぐことを目的に、土塁の帯を昔から防火帯として管理している。冬枯れした草に火を着けると、冬の乾燥した気候も相まって勢いよく燃えだし、その煙は、大宰府政庁がある太宰府市からも見えるほどである。

この山焼きは、基山^{きざん}東麓^{まるぼやし}の丸林集落の青年たちが、山火事への対処として行われていた。昭和15(1940)年頃は、一旦山火事が発見されると夜でも登り、柴の枝を長く切って柴の葉で叩いて消火活動を行っていたと聞く。その後、予防的に防火帯として土塁を活用するとともに、土塁上に木々が根を張り壊していくのを防ぐため、山焼きを行った。山焼きの時は、天候を見極めつつ、家に居るもの総出で行っていた。また山焼きを始めた頃の基山^{きざん}は、飼葉の山で牛馬のための山として活用され、飼葉を育てるためにも山焼きは役立っていた。

その後、昭和40年代に入り全山に植林が進み、昭和63年(1988)には、草スキー場横の丘陵上「日本植林発祥之地」^{はつしよち}を記念する碑が建てられている。



写真 日本植林発祥之地記念碑

【コラム】基山にあった学校林

かつては基山^{きざん}内に記念学校林があり、この記念学校林は、基山の小中学校の児童・生徒たちによって育成され、基山小学校の校舎修理や湯沸かしの燃料材として利用されている。学校林には、管理のために小学生が駆り出され、下草刈や林の手入れが行われ、中学生による燃料材としての薪^{まき}採集等が行われていた。



資料 基山中学校生徒による薪採集(昭和24年)